信毎歌壇

小池　光選

貸し出しのカードにみつけた君の名の本を抱きて泣いた初恋　（松本市）成沢　怜乃

ふむふむと頷きながら日記読み過去の私と対話する秋　（木祖村）佐々木千代子

ぐにゃりとした足の感触ぞっとして背筋の凍る闇夜の熟柿　（長野市）丸山　祐司

晩秋の林道を走る落葉踏み我が影だけを友としながら　（佐久市）高橋衣里子

遠き日の湯気のむこうに箱膳を囲む九人家族のまぼろし　（長野市）池田よし江

暗記させられたころはこんなに役に立つものとは思っていなかった九九　（長野市）原田　浩生

豪快にフライパン振る爺さまのチャーハン匂い来コスモスの庭　（長和町）羽毛田　栄

歩くこと食べることさえままならぬ妻の手となり足となり生く　（御代田町）土屋　春雄

皆神山の湧き水で棲みな沢蟹親子こんなへドロの側溝やめて　（長野市）島田　怜子

診察日次はクリスマスイヴですねカレンダー指し主治医の笑う　（小諸市）池田　真弓

佳作

叔母死して遺品となりし歌ノート歌集に編みて叔父が持ち来る　（千曲市）たじまたける

少女の日友と食みしを思ひ出し梅の朱実を口にふふみぬ　（東御市）小林　嘉代

選評　第一首、昔の図書館の本には貸出カードというものがついていた。前に誰が借りたかわかる。彼の名前を見つけて本を抱きしめて、泣いた。いかにも初恋である。第二首、こちらは過去の自分の日記を読む。日記は書いても読むことはあまりないように思う。過去の私はなかなか新鮮だ。第三首、暗闇の中でぐにゃりと何かを踏んづけた。これは気持ち悪い。熟柿ならなおのこと気持ち悪い。

小島　なお選

あの曲のギターミュートのかかつたりかからなかつたりする始まりは　（松本市）岡井　光隆

羽使ひ確かめながら少しづつ飛ぶ距離伸ばす蝶の体力　（長野市）小日向栄子

恒例の祭りに来たるチンドン屋チンドンの意味を異人に説きをる　（須坂市）高橋　都子

山の中枯葉にまじる古紅葉特別なんて思いもせずに　（茅野市）三好　碧

びゆうびゆう冷たい風を顔にうけ話す言葉は旧かな遣い　（大阪市）川田ゆかる

ばあちゃんと呼ばるる時は孫のおり帰りしあとに呼び合う名前　（長野市）原田　富子

多種あれど病む妻に佳き味の素の粥、丸の内タニタの味噌汁　（御代田町）土屋　春雄

紺碧の赤石岳を遠く見る揺れ揺り返す蕎麦の花園　（下條村）塩沢　道雄

FMが鳴ってたはずの歯科医院にすっと現るジェルジュ・リゲティ　（松本市）上嶋　晴美

立ち喰ひの駅そば啜る三人の男の背なに生活それぞれ　（飯山市）小野沢竹次

佳作

おお寒い土鍋探して寄せ鍋か膨らむ思ひ土鍋は何処だ　（長野市）宮沢　信博

散歩道四時半ならば星の空五時半ならば朝焼け仰ぐ　（長野市）新井　健一

選評　第一首、ミュートは振動する弦に軽く指を触れて音を鎮める演奏技法。その時々で曲の始まりが違って聞こえるのは、奏者の存在を親しく感じさせる。第二首、蝶には蝶の体力がある。小さな生き物の確かな前進を丁寧に見つめる。第三首、チンドンとは。あらためて聞かれると悩む。外国人を通して出合う日本語の妙。第四首、木にある時には愛でるのに。特別を特別と気づくのはいつも難しい。

米川 千嘉子 選

初曽孫生まれましたと友からのメール、でなくて喜びの文　（長野市）峯村　玲子

丸帯をリメイクしてるユーチューブマニキュアの手が絹を裁つ音　（飯山市）市村紀久子

話したい人はたくさんいたけれど推しのライブのごとく見しのみ　（松本市）掘内　悠子

義母からの新築祝いはキッチンテーブル六つの椅子に今われひとり　（長野市）島田　怜子

看護士ら太鼓を鳴らし応援の施設運動会もり上がりたり　（長野市）池田よし江

家に迎へてしみじみ思ふわれひとり義父母と血のつながり無きを　（長野市）原田　浩生

電球が突然切れて死に方を蛍光灯と比べてみたり　（松本市）中村　博穂

母と娘の形見は一つにまとめ置く時折出しては触れてみるなり　（長和町）羽毛田　栄

高原の村一軒のコンビニの御幣のやうなハロウィン飾り　（須坂市）東島・雄二

行商に出掛ける母の後を追ひ泣きし弟喜寿迎へたり　（飯綱町）坂井　寿男

佳作

間違いをそうだと言えぬ間違いを幾夜重ねて父は逝きけり　（安曇野市）細川　恒

みゆき野に蝗を捕りし日のはるか昆虫食はやりの言葉　（長野市）丸山　祐司

選評　第一首、メールなら素早く手軽。しかし、これは手紙で伝えなければならない喜びなのだ。第二首、今は使われない丸帯をバッグなどに作り直す映像。そこに映る指のきらきらしさと昔ながらの「絹を裁つ音」の対比が効いた。第三首、憧れの芸能人やスターではないのだから、話しかければよかったのだ。自らが歯がゆい。第四首、椅子はそのままなのににぎやかな家族も義母も去って夢のよう。